

大通公園を望む窓辺から

箱根ランナーの足元

常任理事 荒木 啓伸 あらかき ひろのぶ

今年も新年の幕開けとともに、箱根駅伝のスタートが切られた。

私は、箱根ランナーの足元にも注目している。2017年の箱根駅伝までは、駅伝のシューズは薄底で軽量が定番で、中でもアシックスやミズノのシューズを履いているランナーがほとんどだった。ところが2017年7月に、ナイキがカーボンプレート内蔵の厚底シューズを発売したことを契機に、ランナーの足元が一変した。2018年の箱根駅伝では、発売されたばかりのナイキの厚底シューズで走ったランナーは18.6%だったが、その後、ナイキのシューズが徐々に増え始め、2021年には、ナイキで箱根路を疾走したランナーがなんと95.7%と、ほぼ独占状態となった。そしてその年、かつての定番アシックスのシューズを使用したランナーはついにゼロとなり、趣味のランニングでアシックスを愛用している私にとっても大きな衝撃だった。そして、2022年には、箱根駅伝の10区すべての歴代区間記録が、ナイキの厚底シューズでの記録となった。

しかし、アシックスをはじめとした他のシューズメーカーも黙ってはいない。各社とも厚底タイプのランニングシューズの開発にしのぎを削るようになり、熾烈なシェア争いが始まったのだ。2022年ではナイキのシェアは73.3%となり、2023年の往路では、全ランナー105人中、ナイキのシューズが65人、アディダスが19人、アシックスが14人となり、かつての王者アシックスも、着々と追い上げてきた。そして、今年の箱根駅伝の中継では、トップランナーにしか履きこなせない厚底カーボンシューズのCMを複数社が放映する力の入れようだ。

復路6区のスタートの中継を見ながらこの原稿を書いている。足元はナイキがやや多いようだが、アシックス、アディダスを履いたランナーも次々とスタートを切っていった。ランナーの熱戦を観戦するのはもちろん楽しみだが、もう一つの争いにも今後とも注目していこうと思う。

D-51：デコイチ

理事 吉田 茂夫 よしだ しげお

40歳台の同僚職員に、「デコイチって何のことか分かりませんでした」と言われて、子供公園においてある、外側正面に「D-51」とプレートで名前が書かれている蒸気機関車の名前と話したが、「40代以前の若い年代の人にとっては分からないかもしれません」と言われ、「D-51」を知らないことが普通の社会になったことの年代差にいささかショックを受けた。

私が小学4年生の時に、記憶は定かではないが、労働者の日か何かの記念日の折に学校を代表して数名の生徒と共に、住んでいた幌別（登別市）から東室蘭までの二駅程度の距離をD-51の運転席に体験乗車させてもらったことを思い出した。私にとってはわくわくするような体験で、運転助手の方が真っ赤に燃えている窯の中に、足でペダルを蹴って窯の蓋を開け、同時に手に持ったスコップで石炭コークスを掬い、そしてあっという間に窯全体に均一にばらまき投げ入れる様は、少しの無駄な動きも感じられず、まるで金メダルを取った体操選手の動きのようで、すっかり魅了され、今でも鮮明に記憶に残っている。子供心にも一生懸命働く者の所作の美しさというものに魅了されたのだと思う。

私が同僚と立ち寄り、美味しい地元の農産物や季節の山菜を食べさせていただく、北見の中心部にあるお店の名前も「D-51：デコイチ」と言う。老夫婦二人でやっている年季の入ったお店で、奥さんが作る「ジュンサイの酢味噌和え」等の家庭料理は、美味しく懐かしい味である。最近、それぞれ体調を崩して入院し心配したが、幸い二人でお店に出られるようになったので、いつまでもお体に気を付けて長くお店を続けてほしいと願っているところである。今度お店に行ったら「なぜデコイチと言う名前にしたのか？」聞いてみようと思っている。

